

2024年5月 12 日 久宝教会 復活節第7 主日礼拝メッセージ

「独り立ちの準備」

水谷憲牧師

聖書 列王記 下 2章 1-15節

私の家族は、私と妻、中学3年生の息子と高校3年生の娘の4人家族なのですが、今年は子どもたち2人とも受験生の年でして、特に上の娘は高校卒業後の進路について悩んでいる真っ最中で、いろいろと大学の情報を集めて調べたり、私と一緒にいくつかの大学のオープンキャンパスに一緒に行ったり、知り合いと一緒に行こうと計画している様子であります。その一方で、もう受験生になるとあまり遊びに行くこともできなくなるからと、ときどき私が休みの日にレンタカーを借りたり電車に乗ったりして一緒に日帰りの小旅行（神社巡りが多いのですが）に行ったりもしています。先日のGWにも、一緒に京都の葵祭を見に下鴨神社へ行ってきたところです。クリスチャンの家庭に生まれたこともあって、キリスト教もイエス様も好きなんだけど、同時に日本の文化としてのお寺や神社も好きな娘であります。お寺や神社に参ることで、日本の独自の文化に触れて知っておくことであったり、キリスト教に限らず、そこで人間よりも大きな存在があるのだといういわゆる宗教心を育むことはむしろいいことではないかと思っ、私も一緒にお参りしております。自分の親だけではなく、近所の知り合いのおじさんおばさんにも丁寧にご挨拶するのと同じ感覚であります。

ともかく、高校3年生という年頃の娘が、このように家族と、特に父親と一緒にあちこち行きたいとか言ってくれることは、実はすごく珍しいことなんじゃないかという気もしますが、私自身も、中3の息子はまだともかく、高3の娘とは「もしかするともうこんなふうに接することはこの先ないかもしれない、場合によっては卒業と同時に家を出ていくことになるかもしれないから」などと思っ、もう二度とないこの時期を、大事にしてあげたいなあと考えているところです。

さて、今日の聖書は旧約聖書の「列王記」、イスラエルのソロモン王の時代から、ソロモン王が死んで王国が分裂し、それぞれの王国が滅亡するまでの物語ですが、今日はその下巻の2章、北イスラエル王国で活躍していた預言者エリヤとその後継者であるエリシャの別れのシーンです。エリヤはエリシャを連れて、ギルガルという町を出た時に「主は私をベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と話します。それに対してエリシャは「主は生きておられ、あな

た御自身も生きておられます。私はあなたを離れません」と答えます。エリシャはエリヤとの別れの時が近いことを感じていたのでしょうか。エリヤはエリシャに自分の後継者として、町にとどまって自分がやってきた務めを引き続き果たしてほしいと願いますが、エリシャはそんなエリヤとまだ離れたくないといいます。実際この日、まさにエリヤは神によって召されることになっていたようで、エリヤはそのためにベテル・エリコ・ヨルダンの各地の預言者の仲間たちへ最後の別れのあいさつに回ろうとしていたことのようにです。そのそれぞれの各地で、エリシャは預言者の仲間たちから「主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか」と尋ねられたエリシャは「私も知っています。黙っていて下さい」と答えます。「知ってるし！ 黙っといってくれるか？」 切れてますねー。みんなには別れのあいさつをしているのに、何で自分には何も言わずに置いて行こうとしているのか。確かに腹が立つかもしれません。

しかしエリヤがエリシャに、「主はわたしを〇〇にまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と告げ、エリシャが、「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」と答えたというやり取りは、合計3回繰り返されているのですが、これはふと思い返せば、ヨハネ福音書21章において、復活のキリストがペトロに「わたしを愛しているか」と3回尋ねられた出来事と重なるわけです。かつてイエスのことを3回否認したペトロに対して「私を愛しているか」とキリストが3度尋ねられ、「私があなたを愛していることは、あなたがよくご存知です」と3度答えたペトロ。イエスの示された「愛」が決して口先の、言葉だけのものではなかったように、今度こそ自分の「愛する」という言葉が、口先だけでその場しのぎの独りよがりな、無責任な言葉とはならないように、全力をもって体現していきますという決意表明でもあったように思えます。それと同様に、エリシャも決してエリヤのことを否認はしなかったけれど、とにかく「何としてでもあなたを離れません、これは私の本気です」という強い思いを示したかった、そういうことだったのではなかったでしょうか。

そしてヨルダン川を渡り終えたエリヤがいよいよ「私があなたの元から取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい」と尋ねると、エリシャは「あなたの霊の二つの分（二倍の分け前）を私に受け継がせてください」と願います。エリシャがエリヤに求めた「二つの分」とは、相続にあたって長子が他の

子どもの二倍与えられる分ということで、「申命記」の規定において定められているものでした。そこには他の預言者たちもいたのですが、エリシャは、自分こそがエリヤの長子であるということを自覚し、それにふさわしい相続に与ることを望んだわけです。エリシャが「私はあなたを離れません」と3度も言っていたのは、別れが避けられないものであるなら、せめてエリヤの長子としてのしるしをいただかなければ、という強い思いでもあったのかもしれませんが。

「あなたはむずかしい願いをするなあ」とエリヤが思わずぼやき、「わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない」と話していると、見る間に、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分け、エリヤは嵐の中を天に上って行ったとあります。あっという間です。「エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂いた」とありますが、あわてて泣いて叫んでも、別れは私たちの想像を超えて、あまりに突然に訪れるものだということを、改めて思わされます。

エリヤは言っていました。「わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない」。エリシャは今回、突然だったとはいえ、エリヤがエリシャの元から取り去られるのを目撃することができました。つまり、エリヤとの別れに何とか立ち会うことができたわけです。ですからその結果、エリシャは自分が望んでいた、エリヤの霊の二倍の分け前を受け取ることができました。しかしそれならば、自分の尊敬する人・愛する人との別れの場面に立ち会うことができなかった人、自分のもとから大事な人が取り去られるのを見ることができなかった人、すなわち死に際の別れができなかった人、死に目に会うことのできなかつた人はどうなるのか。せめて愛する人との絆をいつでも再確認できるようなしるしをいただいてから別れたいという願いはかなえられず、後悔したままでその後も続いてゆく人生を送っていかなければならないのでしょうか。

先日、「すずめの戸締り」という映画を見ました。東日本大震災で母を亡くしてしまった主人公の女性、彼女にはお母さんとの死に目に会うこともできず、ご遺体も出てこなかったためにお母さんとの別れをきちんと経験することができなかった、

そういう心の傷があるのですが、そんな彼女がいろんな人との出会いや不思議な出来事によって自分の心の傷を少しずつ癒して乗り越え、自分で歩いて行けるようになってゆくという成長物語であったように思います。その映画の監督が、ある時のインタビューでこういうことを言っておられたようです。「どんなことを経験しても、その後も人は生きていくことができる。今、辛いことがあっても、来年の今頃は笑っているかもしれない。苦しみや困難の先には希望がちゃんとあるし、過去の自分に「だから大丈夫だよ」と伝える未来の自分がきつという。そんなことを伝えたくてこの作品を作りました」。

エリヤは確かに「わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない」などと言っていました。しかし、愛する者が自分のもとから取り去られるのを見ることができなかつたから、きちんとお別れをすることができなかつたから、私のその後の人生は鬱々とした後悔ばかりの暗い人生になってしまうのかということ、そんなことは決してない。時間はかかるかもしれないけれど、別れを経験することのできなかつた痛みは時間と共にきつと癒されていくし、愛する人との絆をいつでも感じていたいという私の願いもきつと叶う。その時は悔しかったり悲しかったり混乱していたりするかもしれないけれども、きつといつか私たちは、愛する人との絆をいつも感じながら、独りで立って歩いてゆける時が必ず来ることを信じます。

先週の木曜日は昇天日、復活のキリストが弟子たちとしばらく共に過ごした後にいよいよ天へ昇って行かれたという日です。残された弟子たちはこれからどうしたらいいのか、不安だったことでしょう。しかしキリストは「いつかあなたたちの上に聖霊が降る、あなたたちは決して独りではない」と約束された。その通り、五旬祭の日に弟子たちの上には聖霊が降され、その聖霊によって弟子たちは本当に力強く生まれ変わり、世界中にキリストを宣べ伝える者へと変えられていったわけです。キリスト教の曆的には、今はキリストが天へ昇って行かれてから弟子たちに聖霊が降されるまでの空白の期間、私たちにとっては言わば「独り立ちの準備」の期間、と言えるのかもしれませんが。その時期を私たちも大事にして、いつか私の上にもキリストは約束の聖霊を降ろしてくださるのだ、そのような形でキリストはいつも私たちと共にいてくださるのだと、そこに希望をもって私たちはこれからを歩んでいきたいものだと思います。